東日本大震災12年

「息子を殺したようなもの」

消えぬ自責 語り続ける

石巻の女性

「私は、息子を殺してしまったようなものです」。1月下旬、宮城県石巻市長面地区の防潮堤で、語り部の三條すみゑさん(64)＝同市＝が約10人の参加者を前に声を詰まらせた。消えない自責の中、二度と悲しみが繰り返されないようにと、東日本大震災の津波で三男泰寛さん＝当時(17)＝を失った状況や思い出を語り続ける。

津波で犠牲になった三男泰寛さんのパネルを見つめる語り部の三條すみゑさん＝宮城県石巻市長面地区

津波前のメール

2011年3月11日、高校を卒業したばかりの泰寛さんは長面地区の自宅にいて、すみゑさんは市街地に出かけていた。大きな揺れの後、車で自宅に向かったが、道路が渋滞。携帯電話はつながらず、メールでのやりとりとなった。

「どこにいる？」「家。中はめちゃくちゃだけど、ガスの元栓は閉めた」「津波警報が出ている。逃げろよ」。すみゑさんはそこに一文加えた。「おっかあも、そっちに向かっているからな」。通信はその後途絶えた。

道路が被災して自宅に戻れず、12日夜に避難所で夫(71)と再会した。翌日、捜索に出た夫が自宅近くの寺で泰寛さんの遺体を確認した。14日が18歳の誕生日。春からの就職が決まっていた。バレーボール部で練習に打ち込み、穏やかな性格だった。その夜、消灯した避難所で布団をかぶり、声を押し殺して泣いた。

長面地区は災害危険区域として人が住めなくなり、19年に集団移転先で自宅を再建。震災から10年たった21年夏、自宅で長男(36)が突然切り出した。「おっかあ、やすに何てメールした？」。メールのやりとりを伝えると、こうつぶやいた。「それだ。たぶん逃げずに家で待っていたんだ」

揺れの後、近隣住民が泰寛さんと一緒に逃げようとしたが、泰寛さんは「家を片付けてから出る」と断ったという。長男は震災後にその話を聞いていた。傷つけまいと長い間黙っていたのかもしれない。避難の途中で津波にのまれたと思っていたすみゑさんは、ショックでその後何日もぼうぜんと過ごした。

「命守る行動を」

当時、家族を待って逃げ遅れ、津波の犠牲になった人も多かった。悲しんでも泰寛は帰ってこない。そう考えるしかなかった。

17年から、児童・教職員計84人が犠牲になった市立大川小の児童遺族らでつくる「大川伝承の会」で語り部として活動していた。この経験は迷わず伝えようと決めた。

悲しみは癒えないが、話すことが心のリハビリになった。もう二度と同じことは起きてほしくない。「皆さんは誰かを待たないで、自分の命は自分で守って。家族や大切な人と、どう避難するか事前によく話し合って」と訴え続ける。